

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22390428

研究課題名(和文) 外来がん医療における看護師の役割拡大を図る看護マネジメントモデルの構築と検証

研究課題名(英文) Development and appraisal of a nursing management model for expanding the role of nurses in outpatient cancer care

研究代表者

浅野 美知恵 (ASANO, Michie)

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：50331393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,900,000円、(間接経費) 4,170,000円

研究成果の概要(和文)：一般病院外来におけるがんサバイバーシップを支援する看護師の役割拡大を目的に、現状分析に基づき、外来がん看護実践力開発プログラムと組織の強みを活かす外来がん看護システムを考案し、包括的がんチーム医療における外来看護師の役割機能を加えて、統合した看護マネジメントモデルを構築し、臨床現場で検証した。看護マネジメントには、ケア創生力のある実践、柔軟なチーム創生力のある組織、共にセルフ・エンパワメントを活かす環境創りが必須である。

研究成果の概要(英文)：Using current data analysis, we constructed an outpatient cancer nursing system in incorporating organizational strengths and a program to develop outpatient cancer nursing competency in order to expand the role of nurses in supporting cancer survivorship in general hospital outpatient care. From this, we developed an integrated nursing management model that also amalgamated the roles and functions of nurses in comprehensive team-based cancer care, and appraised the model in a clinical setting. Nursing management requires experience with the power of creative care, organization of a flexible team with creative power, and the creation of an environment that takes advantage of combined self-empowerment.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：看護学 外来がん医療 マネジメントモデル 看護師 がんサバイバーシップ リーダー 役割拡大
継続看護

1. 研究開始当初の背景

外来がん看護に関する国内の研究からは、家族員を含めた包括的な援助サービスが未だ開発途中であるという現状が明らかである。近年、7対1の診療報酬加算に関連して外来看護実践現場では体制が小規模化される傾向にある。一方、入院期間の短縮が図られ、がん治療継続により通院患者は増加し、外来での患者と家族員の在宅療養に対する援助ニーズは高まり重要性が増している。

海外では、外来での看護実践方法、外来患者のケアに対する満足度調査、看護師主導のクリニック(nurse-led clinic)の評価、さらに、nurse-led serviceの実践に関する文献レビューが行われ、外来看護師の果たす実践的役割の探究および開発が示唆されている。

本研究メンバーは、これまで外来がん看護に着目した研究を蓄積し、平成17年度より消化器癌術後患者と家族員の社会復帰促進のためのチーム医療に基づく外来看護システム(基盤研究(B)(2)、平成17~20年度)の開発を目的としてアクションリサーチを実施した結果、目的達成のためには看護マネジメントが課題であることを明らかにすることができた。同時に、外来がん看護マネジメントの課題は、我が国全体の課題であることも明らかとなった。がん医療の均てん化に即して質の高いがん看護実践を可能にするためには、この課題解決が急務であると言える。

2. 研究の目的

本研究は、一般病院外来でのがんサバイバーシップを支援する看護師の役割拡大を図る看護マネジメントモデル提案を目指す臨床研究であり、次の3つの課題考究から成る。

(1) 外来がん看護実践力の考究

通院がん患者とその家族員に関わる外来看護師のセルフ・エンパワーメントを促進する要因を明らかにする。[22年度]

外来がん看護に携わるリーダーの効果的支援法を明らかにする。[22年度]

外来がん看護実践力開発プログラムを考案する。[23年度]

(2) 外来がん看護組織力の考究

看護組織のセルフ・エンパワーメントを促進する看護管理のあり方を検討する。[22年度]

看護専門外来の継続に関する要因を明らかにする。[22年度]

外来がん看護部門組織化とマネジメント法の現実に即したあり方を検討する。[23年度]

施設に特化した強みを活かす外来がん看護システムを考案する。[23年度]

(3) 包括的がんチーム医療における外来看護師の役割拡大の考究 [24~25年度(最終年度)]

上記A.Bの結果を統合し、

外来がん医療における看護師の役割拡大を図る看護マネジメントモデルを考案する。

上記を臨床現場で検証・評価する。

上記に基づいて一般病院でのがんサバイ

バーシップ支援を実現するための看護師の役割拡大を図る看護マネジメントモデルを提案する。

3. 研究の方法

臨床研究である本研究は、アクションリサーチによる研究方法により、現場の看護師とともに、外来がん看護部門での検証・評価の過程を、以下の研究方法によって構成した。具体的方法は、研究成果の項で示す。

初年度は、トータルペインの視点から外来がん看護実践力開発プログラムを開発するための外来看護師へのアンケート調査と面接調査、施設の強みを活かす外来がん看護システムを考案するための看護管理者へのアンケート調査、関連領域の文献調査を行う。協力施設でのアクションリサーチを開始、最終年度まで継続する。2年目は、トータルペインの視点から通院がん療養者のトータルケアが促進される看護プログラムの考案と外来がん看護部門の組織化とマネジメント法を明らかにするために、文献調査と聞き取り調査、先駆的に外来がん看護を実践している施設のフィールドリサーチを行う。協力施設において外来がん看護部門開設に向けた調査を行う。3年目から4年目(最終年度)は、外来がん看護実践力と看護組織力を統合する外来がん医療における看護師の役割拡大を図る看護マネジメントモデルを構築し、協力施設の外来がん看護部門で検証する。

4. 研究成果

目的ごとの主な研究成果は、以下である。研究代表者所属倫理委員会および協力施設倫理委員会の承認または協力施設責任者承諾の後、同意の得られた者に実施した。

(1) 外来がん看護実践力の考究

外来通院するがん患者・家族に関わる看護師への調査(22年度)：自記式質問紙(SCI、EAS、日本語版POMS短縮版等)郵送法。対象：がん診療連携拠点病院86施設207名(回収率49.5%)。

結果：1)ストレス対処行動(SCI)は、物事への挑戦が高い傾向、肯定評価、計画性、自己コントロール、責任感の順に高。パーソナリティ特性(EAS)は、円熟性と適応性が高い傾向、合理性と直感性はやや低。気分の状態(日本語版POMS短縮版)は、緊張感が高い傾向。2)主体的活動への要望：直接的ケア活動体制の整備、実践的知識・技術の修得、継続看護を提供する勤務体制、チーム医療の強化、外来看護の組織的重点等であった。3)外来看護師への支援：院内教育92.3%、外部研修の公費出張30.9%等であった。

考察：1)高い対処行動項目は、看護師の主体性を標榜するものといえる。2)看護師のセルフ・エンパワーメント促進には、パーソナリティ特性の円熟性・適応性を適切に評価し、合理性と直感性に関わる特性の精査

が考えられる。看護師のセルフ・エンパワーメント促進要因には、直感性の基盤となる実践力等が考えられた。

外来がん看護に携わる看護師へのフォーカスグループインタビュー(22年度)

対象:上記(1) 対象者で本調査に同意した10名。結果:支援要望は、直接的ケアの実施体制、多様な看護師集団の役割認識の強化、他職種連携体制等であった。外来がん看護リーダーに対する効果的支援法は、リーダーの責務とする多様な看護師集団の質向上への支援等が明白となった。

考察:外来がん看護師のセルフ・エンパワーメント促進支援のあり方は、看護師の高い緊張を緩和し専門職者としての自律の承認と学習意欲への組織的対応、職種連携するチーム医療での役割・機能の充実等が必要である。

-1.協力施設に外来通院するがん患者と家族員への調査(23年度):QOL(SF-8)、トータルペインとケア満足度に関する無記名自記式質問紙調査票手渡し配布・郵送回収法と面接法。分析は、統計処理とt検定、記述内容の質的帰納的分析法。

対象:患者28名と家族員22名の計50名。結果:1)苦痛:患者の苦痛は高い順に、活動、身体、治療、人生、排便。家族員の苦痛は高い順に、身体、家族、人生、睡眠、活動。治療、排便、活動の苦痛は、患者が有意に高(P<0.05)。2)ケア満足度:看護師に守られていた、優しい態度で対応は、患者・家族員共に高く、プライバシーへの配慮、治療を続けながら社会生活に対する援助は、患者・家族員共に低かった。3)QOL:患者の低いQOLは、身体機能、日常役割機能(身体)、社会生活機能。家族員の低いQOLは、日常役割機能(身体)、社会生活機能、日常役割機能(精神)。心の健康は患者と家族員が同程度、身体面の健康は患者が低い、活動の苦痛は患者が家族員の2倍程度高い等。考察:以上は、トータルケアを目指す看護プログラムの強化内容といえる。低いケア満足度の内容からは、通院治療と社会生活維持を両輪として保持したい患者と家族員の信条が示されていると考えられ、トータルケアとしての援助が急務といえる。

-2.外来がん看護実践力開発プログラムの考案[24年度]:外来がん看護のリーダーを中心に認定看護師、スタッフ看護師などの役割を明確にするとともに、既研究成果に加え関連文献の検討により、看護実践力向上のための教育にも適用できる活動内容と方法を明記した標準看護計画の改定を実施した。

(2)外来がん看護組織力の考究

がん診療連携拠点病院の看護管理者への調査(22年度):看護組織と看護専門外来継続に関する質問紙郵送法。

対象:88施設97名(回収率55.7%)。施設の規模は300床から700床未満が70%、外来患者数は1000人以上が50.5%、外来看護職員数は40人以上が69.1%、常勤者の割合は60-80%未満が24.7%、20-60%未満が48.5%であった。回答者の内訳は、勤務場所は看護部85.6%、兼務4.1%であり、現所属歴は2年未満36.1%、3-5年未満18.6%、全看護経験年数は30-35年未満が42.3%、年齢は50歳代62.9%であった。結果:1)外来がん看護活動の現状:看護活動が十分・ほぼ十分の回答内容は、検査説明67.0%、診療補助56.7%、処方薬の説明44.3%、患者の相談対応41.2%、家族の相談対応40.2%、セルフケア教育/指導36.1%、生活指導28.8%等。2)外来看護師への支援体制:院内教育93.8%、公費出張の外部研修63.9%、学会活動支援52.6%、公認外部講師活動50.5%。院内教育の内訳は、がん化学療法看護85.7%、がん看護の役割63.7%、患者のトータルペイン61.5%、がん患者の身体的苦痛緩和の援助方法61.5%、がん看護を促進する専門看護師・認定看護師の役割活動51.6%で、低回答は、代替補充療法看護7.7%、がん看護における死生観6.6%、がん看護における看護理念/看護哲学5.5%。3)看護専門外来:設置している77.3%、内訳は、リンパ浮腫13.3%、緩和ケア5.3%等。継続期間は、3年未満がフットケア45.4%、ストマケア32.0%、療養相談20.0%、不妊相談10.6%等。

考察:1)外来看護の実態は、常勤者の割合が約半数の施設が大半を占めており、診療支援活動が多く、相談対応や生活指導などの看護活動には手が回っていない現状が明らかであり、専門外来の開設は多いが、必ずしもがん患者に特化するには至っていないと考えられる。2)看護組織のセルフ・エンパワーメントを促進する看護管理のあり方は、看護管理の本質の具現化と同時にスタッフの看護満足度向上が必須である。

がん診療連携拠点病院の看護管理者への調査(22年度):看護組織と看護専門外来継続に関する質問紙郵送法。記述内容の分析。

対象:上記(2)の対象者。

結果:看護専門外来の継続要因は、ニーズの特定、施設の取り組み、スタッフの内発的動機、連携・協力体制、スタッフへのサポート体制等に集約された。

考察:がん看護専門外来を発展させる看護マネジメントは、自ら行動を起こすセルフ・エンパワーメントを強化する教育の充実に加え、ニーズに応じ、目的を定めた連携・協働体制の構築が有効であるといえる。

協力1施設での外来がん看護部門開設に向けた調査(23年度):組織環境、リーダーシップ、組織の強みを活かす外来看護部門の方向性に関する自記式質問紙法と面接法。

対象:管理職者18名(男性12、女性6)。平均年齢51.1歳。平均所属年数11.3年(5ヶ月~

31年)、平均経験年数27.1年(14年~36年)。結果:1)組織環境:内部環境の強みは、職務能力の高さ、部署間のコミュニケーションの良さ等で、弱みは、専門活動の制約、がん集学的治療の不十分さ等。外部環境の機会は、センターの需要増、地域住民の高齢化に伴う受療率の向上等で、脅威は、近隣に病院の増加・改築、深刻な医師・看護師不足等。2)外来がん看護に対する思い:外来と病棟では看護師の動きが全く違うことを看護師間でも理解できていない、外来と入院の両方が大事なのに連携がうまくいっていない、他職種から看護師の役割期待がある、看護師の絶対数が不足している等であった。3)理想の外来運営に対する思い:看護師や薬剤師など医師と対等に稼ぐことができる、1人の患者に必要な職種が十分時間をかけて関わられる、専門の職種と事務がペアになって患者の苦痛や不安を軽減できる、外来患者も入院患者と同様にいろいろなサービスが受けられる、看護師は看護業務ができる、どのような患者にも対応できるようにセクシオナリズム意識のない体制である、建物のアメニティが高いなどであった。4)リーダーシップA:自己と上司を評価。仕事への厳しさ、生産性、集団維持、公平さ、面倒見の良さに関する8項目(あてはまる、あてはまらない)。仕事への厳しさと生産性の追求「あてはまる」の回答は、自己も上司も3割強であった。集団の維持と公平は、自己が約7割~6割、上司が約4割であった。面倒見が良いは、自己が5割、上司が約2割。5)リーダーシップB:リーダーシップ2機能の自己評価。目的達成機能と集団維持機能に関する20項目(5段階リカート評価:1:全くそう思わない、から、5:とてもそう思う)。平均値の範囲は、3.1から4.3であり、集団維持機能項目の得点が高い傾向。平均値4.0以上の項目は、新メンバーへの格別の配慮と融和、自分が言ったことに責任をもち率先して徹底、相互補完的に仕事をする雰囲気や醸成、部下の合意と納得による協力を重視、チームとしての一体感を醸成し協働関係を作り出す、等。目的達成機能項目は低い傾向にあり、平均値3.5の項目は、より高い状態を志向、自らビジョンを示し具体的なイメージを共有等であり、平均値3.4以下の項目は低い順に、高い目標を掲げ率先して行動に傾注、組織全体を望ましい方向へ牽引、言行が不一致で信用を失ったり反感を買うことはない、等。考察:1)組織環境の認識と理想の外来運営に対する思いの結果からは、全職員が組織の弱みや脅威を受けとめた上で全職員が一体となって良質な医療を提供するという同じ目標に向かう重要性が示唆される。2)組織の内部環境と外

来がん看護及び理想の外来運営に対する思いの結果からは、どの職種も専門性を発揮できることを理想としているといえる。3)組織の強みを活かす外来看護部門は、組織の一体感の下に、全職種連携による患者の経過に沿った専門力発揮の体制を整備し、看護独自の機能をいかに表現できるかによって方向づけられると考える。4)リーダーシップの発揮として、仕事への厳しさと生産性の追求は、自己も上司も同じ視点で捉えているといえるが、集団の維持・公平・面倒見は自己を上司より高く評価している。目標達成機能に比して集団維持機能の発揮を強く意識していると考えられ、そのための自己努力に対する不足感が示されているといえる。リーダーシップにおいて、集団を導くためのビジョンや具体的目標をあげ浸透させること、率先して行動すること、スタッフを牽引することを強化することが課題であると捉えられる。外来がん看護部門を組織化するためには、がん看護専門外来の開設に向けた具体的な目標を明文化すること、その部門のスタッフと目標を共有すること等のリーダーシップの発揮が課題であると考えられる。

施設の強みを活かす外来がん看護システムの考案[24年度]:既調査結果に関連文献考察を加え、看護管理者と外来がん看護リーダーと目標達成に向けた組織図を作成し、院内の会議等で資料配布と説明により院内へ周知を図り、外来がん看護部門の環境を整備。

(3)包括的がんチーム医療における外来看護師の役割拡大の考究

関連の情報収集及び文献による検討:外来がん看護の取組みは海外が先駆的である。

(23年度)先駆的に外来がん看護を実践・教育している米国テキサス州のマグネットホスピタルと看護大学の視察:4施設、上級実践看護師と看護教員7名。外来がん看護には、上級看護ケアプラン、倫理的問題に対処する高度なコミュニケーション技術が必須。(24年度)先駆的外来がん看護の地域連携・チーム医療に取り組んでいる英国ロンドンの医療施設と看護大学視察:4施設。医師、看護師、教育担当者(経営学者)ら9名。外来がん看護実践力を高めるプログラム創りには教育の標準化と教育レベルの具体的明示、施設の強みを活かすには質保証の評価システムの提示が必須。(25年度)看護臨床教育調査:米国ハワイ州1看護大学・2医療施設視察により関連情報収集。看護管理者とAPN等23名と意見交換。価値の共有を基盤に実践力・組織力に関わるリーダー教育のあり方等の知見を得た。(25年度)文献検討からビジネスモデル論等も参考に精練の視点を得た。

上記(1)-(2)と(3)の検討結果を統合して、外来がん医療における看護師の役割拡大を図る看護マネジメントモデルとした。

-1外来がん医療における看護師の役割拡大を図る看護マネジメントモデルの試行
試行期間：平成24年12月～3月17日。毎月約28件実施・高評価。運用の微調整とケア評価の視点・内容の再確認。適用開始：25年3月18日。ケア評価・目標達成度の検証データ収集は、次年度5月から実施した。

-2考案した外来がん医療における看護師の役割拡大を図る看護マネジメントモデルの検証・評価[25年度]

1)外来がん看護部門の環境整備、新たながん看護実践の標準看護計画明示、質保証の評価を提示し、平成26年3月まで約12ヶ月間実施。
2)評価に関わるデータ収集・分析結果

a)患者・家族員調査 ケア評価：39名。援助目標はほぼ達成。継続支援内容は、病状に応じた社会活動、家族員の精神的苦痛等であった。QOL(SF-8)調査：44名。平成23年度比較では全項目得点が上昇、特に活力が高。日本国民標準値(同年代)比較では社会生活機能と日常役割機能(身体)が有意に低。面接調査：患者8名と家族員5名。ケア満足度は患者が非常に高。家族が低かったのは活動と家族役割。
b)ケア実施看護師調査：29名。活動の主体性等の調査(日本語版POMS短縮版、EAS、SCI)、2回実施。緊張がやや低下傾向、適応性が高まり逃避が低下傾向であった。
c)管理職者調査：11名。組織運営等に関する質問紙法・面接法調査実施。平成23年度と比較。仕事への厳しさ「あてはまる」は自己・上司8割弱で前回の2倍、集団維持機能も目的達成機能も項目得点は上昇、集団維持機能項目得点が高い傾向であった。外来がん医療の現状は、従来型医療から移行、地域包含型へ移行模索、患者の生活支援に看護専門力発揮を期待等。
(3)今後の課題：看護師個人・組織に対する簡便なセルフ・エンパワーメント方略、流動する状況でのケアチーム創り等が明白となった。

一般病院でのがんサバイバーシップ支援実現のための看護マネジメントモデル提案

マネジメントの3視点と考え方のシフトを表1に示す。こられの考え方により、主体的活動の基盤をセルフ・エンパワーメントにおき、自律性を発揮する新たな外来がん看護の方向性を導くと考える。

表1. 外来がん看護マネジメントの視点と役割拡大に関わる主な考え方の方のシフト

マネジメントの視点	役割拡大に関わる主な考え方の方のシフト
トータルケアの実践	業務偏重・ケアの質偏重意識 ケア創生力
外来がん看護の組織	部署配属意識 柔軟なチーム創生力
看護師個人と看護組織のセルフ・エンパワーメント	制約感による活動自制・ プロフェッショナルとしての自覚的活動 共にセルフ・エンパワーメントする環境創り

一般病院でのがんサバイバーシップ支援実現のための看護マネジメントモデルは、

本研究者が科研費補助金研究成果報告書[基盤研究(B) 2005-2008年、課題番号17390586、消化器癌術後患者と家族員の社会復帰促進のためのチーム医療に基づく外来看護システム]で報告した「外来看護における新たなコンセプト」(表a)に基づき発展させた。

表a. 外来看護における現状と新たなコンセプト

項目	現状	新たなコンセプト
外来システム	診療中心体制	利用者中心体制、集学的チーム医療体制
外来利用者	治療受ける者	健康生活学習者/主体的生活者
看護の役割	診療の介助中心	療養上の世話と診療の介助との2本柱
看護援助	看護師個人の対応	利用者の主体的な学習/健康生活への支援体制作り

理論的基盤を、臨床看護学、がん看護学、高度実践看護、文化人類学、心理学、組織論、リーダーシップ論、ビジネス論などにおく。

本マネジメントモデルは、価値の共有を基盤に看護師個人の専門職者としての知的・道徳的魅力をいかに引き出すか、その施設の看護組織/集団の魅力をいかに引き出すか、という発想の重要性を提案するものである。

(4)アクションリサーチの成果

協力施設の外来がん看護リーダーを支援することによって、リーダーは、セルフ・エンパワーメントが為されており、院内へ成果の普及が期待される。

支援内容： 外来がん看護学習会を月1回定期的開催。研究成果の学会発表・討議。(22年度)外来看護支援や化学療法患者の倦怠感など。(23年度)外来がん性疼痛看護やがん治療に伴う皮膚障害等。研究者による組織・人材開発研修会と組織的協働のあり方共有。(24年度)乳がん看護や外来看護師支援のあり方等。(25年度)がんチーム医療のあり方等。

協力施設に外来看護部門を設置することができ、外来がん医療における看護師の役割拡大を図る看護マネジメントモデルの考案と検証によりがんサバイバーシップ支援活動に貢献できた。

以上から、当初の目的は達成されたといえる。

<今後の展望>

米国のマグネットホスピタルおよび連携・協働する施設では、具体的な価値の共有を基盤に各職種が役割発揮できる環境整備にも取り組み、看護師は自律して主体的に役割を発揮し成果を上げている。日本では、看護師が自律して役割発揮できる環境については未だ模索段階である。したがって、外来がん医療においてがんサバイバーシップを支援する看護師の専門職者としての役割発揮を推進し発展させるためには、看護マネジメントにおける考え方の転換、専門職者としての知的・道徳的魅力の引き出し法の開発などが必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

山崎智子、浅野美知恵：グリーフを生きる人々へのケアのあり方～看護立場から、上智大学グリーフケア研究所紀要『グリーフ』、2 巻、2014 年 3 月、P.19-34、査読無

〔学会発表〕(計 18 件)

Michie Asano, Reiko Sato: Issues regarding support for nurses' self-empowerment and system development to improve outpatient cancer nursing function, 18th International Conference on Cancer Nursing Hilton Panama, Panama City, Panama, on September 9, 2014(on schedule)

浅野美知恵, 佐藤禮子, 岡本明美：看護師の実践力向上をもたらすセルフ・エンパワーメントのあり様と支援のあり方、第 28 回日本がん看護学会学術集会、平成 26 年 2 月 8 日、新潟市、ホテル日航新潟

福田靖子、石田智恵子、石黒結花、浅野美知恵：再発乳がん患者の療養生活を支える医療チームの取り組みとチームケアのあり方、第 28 回日本がん看護学会学術集会、平成 26 年 2 月 8 日、新潟市、朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター

石黒結花、石田智恵子、福田靖子、浅野美知恵：がん性疼痛を抱えながら生活する患者・家族を支える取り組みとチーム医療のあり方、第 28 回日本がん看護学会学術集会、平成 26 年 2 月 8 日、新潟市、朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター

石田智恵子、石黒結花、福田靖子、浅野美知恵：がん治療に臨む患者の不安に対する援助とチームケアのあり方、第 28 回日本がん看護学会学術集会、平成 26 年 2 月 8 日、新潟市、朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター

Michie Asano, Reiko Sato, Akemi Okamoto: Organization of support for outpatient departments responsible for providing cancer survivorship care in Japan, The 1st Asian Oncology Nursing Society Conference, 2013, Nov.21-24, Bangkok, Thailand, the Faculty of Medicine, Siriraj Hospital, Mahidol University, Bangkok, Thailand

浅野美知恵, 佐藤禮子, 岡本明美：外来がん医療における看護の役割拡大を図る看護マネジメントのあり方、第 27 回日本がん看護学会学術集会、平成 25 年 2 月 17 日、金沢市、ANA クラウンプラザホテル金沢

福田靖子、石田智恵子、浅野美知恵：妊娠期発症乳がん患者の治療に臨む苦悩を支える看護、第 27 回日本がん看護学会学術集会、平成 25 年 2 月 17 日、金沢市、ANA クラウンプラザホテル金沢

浅野美知恵, 佐藤禮子, 岡本明美：外来がん看護部門の組織化に向けたリーダーシップのあり方、第 32 回日本看護科学学会学術集会、平成 24 年 11 月 30 日、東京、東京国際フォーラム

横村妙子、石黒結花、石田千恵子、福田靖子、茅野昌子、浅野美知恵：外来看護師の主体性に関わる特性と外来看護活動支援のあり方、第 50 回日本社会保険医学会総会、平成 24 年 11 月 8 日、金沢、石川県立音楽堂

Michie Asano, Reiko Sato, Akemi Okamoto: Improving nursing organizational capability to assure quality of nursing care for cancer outpatients, 17th International Conference on Cancer Nursing (Prague, Czech Republic), 2012, September 12, Hilton Prague Hotel, Prague, Czech Republic

浅野美知恵, 佐藤禮子, 岡本明美：組織の強みを活かす外来看護部門の方向性、第 16 回日本看護管理学会学術集会、平成 24 年 8 月 23 日、札幌市、札幌コンベンションセンター

石黒結花、浅野美知恵、石田智恵子、福田靖子：がん性疼痛のある外来通院患者を援助する看護師の苦悩と援助の意味、第 26 回日本がん看護学会学術集会、平成 24 年 2 月 12 日、島根、松江市くにびきメッセ

茅野昌子、石田智恵子、浅野美知恵：自己末梢血幹細胞移植を受ける悪性リンパ腫患者の皮膚障害に対する予防的看護、第 26 回日本がん看護学会学術集会、平成 24 年 2 月 12 日、島根、松江市くにびきメッセ

浅野美知恵, 佐藤禮子, 岡本明美：外来がん看護師のセルフ・エンパワーメントを促進する支援のあり方、第 26 回日本がん看護学会学術集会、平成 24 年 2 月 11 日、島根、松江市くにびきメッセ

浅野美知恵, 佐藤禮子, 岡本明美：がん看護専門外来を発展させる看護マネジメントのあり方、第 31 回日本看護科学学会学術集会、平成 23 年 12 月 3 日、高知市、高知市文化プラザかるぼーと

本間喜代美、石田智恵子、石黒結花、浅野美知恵：消化器癌術後退院後に初めて外来受診する患者と家族員への看護支援の現状と課題、第 25 回日本がん看護学会、平成 23 年 2 月 13 日、神戸、神戸国際展示場

石田智恵子、本間喜代美、浅野美知恵：外来化学療法を受けるがん患者の倦怠感とセルフケアの体験、第 25 回日本がん看護学会、平成 23 年 2 月 13 日、神戸、神戸国際展示場

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅野 美知恵 (ASANO, Michie)
上智大学・総合人間科学部・教授
研究者番号：50331393

(2) 研究分担者

佐藤 禮子 (SATO, Reiko)
関西国際大学・保健医療学部・教授
研究者番号：90132240

岡本 明美 (OKAMOTO, Akemi)
順天堂大学・医療看護学部・准教授
研究者番号：20456007